

三菱地所グループにおけるCSVとは

報告書は「CSV」という考え方を強調しているが、時として外部関係者はその意味を誤解し、CSVを強調する企業の姿勢を批判することがある。それは、彼らが、CSVを「会社にメリットがあればやるが、なければやらないといった打算的発想で、社会課題への取り組みを決定するもの」と捉えるからである。地所グループの姿勢は、そんな単純なものではない。対外的な関係で、何らかの社会課題が出てくれば、まず「課題への挑戦は社会的に意義ありか」という基準で検討される。一旦「意義あり」と判断されれば、その課題に果敢に挑む。これまで、色々な場面で、地所の決定過程を見てきたが、議論の出発点は、常に「社会的に意義ありか」であった。もっとも、これがCSVに対する地所の特徴というわけではない。真骨頂はその先にある。

意義あるものであればあるほど、途中でやめるわけにはいかない。これこそ持続させなければならぬ。そのためには、外部ステークホルダーに加え、投資家にも意義を理解・納得してもらう必要がある。それゆえ、地所は、一旦、取り組みを開始すれば、事ある毎にそれを検討し、NPOの力も借りながら、より良いものへと育て上げていく。とことん知恵を出し、改善しながら取り組みを継続させること。これが地所のCSVへのアプローチである。たとえば、5年前にスタートした「空と土プロジェクト」がある。その見事な成果は地所のこの姿勢を物語っている。



たか いわお
高 巖氏
麗澤大学 経済研究科 教授

持続可能な企業活動に向けたCSR活動の着実な進展と探究



江上 節子氏
武蔵大学 社会学部長 教授

三菱地所のCSR活動は各事業部、グループ会社への普及活動、情報共有、連携、運用のマニュアルや基準づくり等と着実な活動を進展させてきました。その過程で、スタッフから、役員の方まで、一様に探究していたことがあります。「当社がCSRで本当に為すべきことは、何なのか」という自問自答です。今回、CSR報告書で明示したCSVの考え方はその一つの答え。経済的価値と社会的価値の統合を真正面から取り組んでいく覚悟を表明したことです。不動産デベロッパーは自然資源を活用する事業、環境資源に手を加えて変容させていく事業、また、多くの資源を消費する事業でもあり、このことを突き詰めると、持続する企業活動は、社会価値の追求が、経済価値の創出であるという信念に辿りついたという経営の意思が伝わってきました。

代表的な取り組みは、長期環境ビジョンに基づく様々な技術開発への挑戦的な取り組み。もう一つは、街づくりに関わる事業に、社会課題の解決を踏まえるスキームを明確にしたこと。また、森林資源の国産材活用と生物多様性への配慮、そして、国内林業振興への活動等、確実さを増していると言えます。

ご意見をいただいて



CSR委員会の社外アドバイザーである高巖氏、江上節子氏からは、当社グループに求められる課題について、毎回、その時点における社会課題をふまえ、具体的なご意見、ご指摘をいただき、活発な議論が生まれ、新たな気づきにつながっています。

CSRからCSVへ活動の意義が進化する中、活動の持続可能性がますます求められることとなります。このことは、「施し」や「義務」の世界から、企業の「価値創造活動」そのものへと活動の意義が進化・深化することを意味します。これを言い換えれば、何らかの形で「本業」に結びついていることが、活動の持続性を担保する鍵となるということかと思えます。

当社グループが経営資源を活かし、新たな共通価値を生み出しながら、社会課題の解決に真正面から取り組み、継続的に改善していくことがますます必要とされています。今後も時代の要請に応えながら「まちづくりを通じて社会に貢献します」という基本使命を實踐し、企業と社会の持続可能な発展をめざしてまいります。

三菱地所(株) 取締役常務執行役員(環境・CSR推進部担当) 大草 透